

自分の病は自分でも診よう 頼みは薬剤師、業務拡大を

編集委員 大林 尚

[大林 尚](#)

2025 年 3 月 16 日 11:00 [会員限定記事]



坂口眞弓薬剤師と娘の田中みずき薬剤師。田中氏は東大病院勤務の経験をもつ（東京・台東区の蔵前みどり薬局）

ことし東京都内では 3 月に入っても雪がちらつく日があったが、半ばになり花粉の飛散が激しくなっている。テレビをつけると風邪薬や花粉症薬の CM が流れてくる。

「効いたよね、早めのパブロン」(大正製薬)▽「大人も子どももルルが効く」(第一三共ヘルスケア)▽「アレグラは医療用と同成分」([久光製薬](#))——。よく耳にするキャッチコピーだ。

これらは病院や診療所で医師が処方する薬と同じ効果効能をもつとされる。薬局やドラッグストアでは薬剤師などからカウンターを挟んで買うので「オーバー・ザ・カウンタ

一」の頭文字をとって OTC 医薬品と総称される。胃腸薬、うがい薬、湿布、目薬、ビタミン剤など、なじみ深いものばかりだ。

医師が処方する医療用医薬品は処方箋薬と OTC 類似薬に大別される。後者はその名のとおり効果や副作用リスクが OTC 薬と似る。法律上は処方箋を必要としないが、やむを得ない場合を除いて処方箋に基づき売ろう厚生労働省が行政指導している。

日本独特のダブルスタンダード

医薬品は医師が処方する処方薬と、薬局で患者・消費者が選んで買う OTC 薬に大別するのがグローバルスタンダードだ。OTC 薬と同じ成分なのに処方箋なしでは入手できない類似薬は日本独特のダブルスタンダードである。その数およそ 7 千種。2021 年度の市場規模は低く見積もっても 1 兆円に達する。

OTC類似薬は日本独特の分類



(出所) 成瀬道紀日本総合研究所主任研究員



蔵前みどり薬局では薬学生を対象にした症例輪読会で薬剤師が指導していた(東京・台東区)

類似薬は健康保険が利く。処方箋を調剤薬局に出せば薬代は原則、公定薬価の3割ですむ。後期高齢者は原則1割だ。薬剤師資格をもつ日本総合研究所の成瀬道紀主任研究員が解熱鎮痛剤・花粉症薬・湿布薬の公定薬価は同成分OTC薬の税込み価格比6.7～9.8%にすぎないことを突き止めた。しかも非課税だ。

用法を記した薬袋に入れられて渡される類似薬と違い、OTC薬はドラッグストアの棚で目立つようきれいにパッケージングされ、タレントを使ったマーケティングコストがかかっている。にもかかわらず有効成分の含有量は往々にして類似薬より少ない。

「安かろう、よかろう」の類似薬だが患者にとっては医師の処方という購入障壁がある。そもそもOTC薬との関係ではこちらが本家本元。「類似」といういかがわしい呼び

方はいかがなものか。薬をめぐる政策・制度が患者や消費者よりも医師や薬剤師、製薬業界、調剤薬局など供給側を向いているのがわかる。

法規制の強化に動く厚労省

整理しよう。推進すべき2つの方向性がみえてくる。

第一は、医療制度の根幹の改革だ。ダブルスタンダードを解消し、7千種の類似薬は原則、処方箋不要にしてOTC薬のカテゴリーにひっくるめる。患者は安くて効き目のよい薬を身近に入手できる。

これは、類似薬を健康保険の適用から外す保険制度改革と表裏の関係にある。最大の効用は年間1兆円の保険医療費の節約だ。医師はその資格にふさわしい病の治療に専念し、患者は処方箋目的の「お薬受診」をやめる。医療機関に入る初診・再診料や処方箋料、また調剤薬局に取られる技術料のムダも省ける。

ところが厚労省は供給側重視を鮮明にしている。類似薬に処方箋を求める規制について行政指導から法で縛る制度への格上げをもくろみ、今国会に関連法案を出した。与野党を問わず、政治家がこの規制強化の不合理性を主体的に理解すれば法案修正は可能である。硬い岩盤をうがつべく、立法府の力をみせてほしい。

第二は、患者や消費者の意識と行動の変革だ。風邪や花粉症、胃もたれ、腰や膝の痛みなどの症状が現れたとき、まずは薬局で新しいカテゴリーのOTC薬を買って様子を見る。自分で治せる病は自分で診るセルフメディケーションをプライマリーケアの一つに位置づける変革である。

薬には副作用のリスクがある。歴史を振り返れば、1960年代のサリドマイド事件をはじめ、私たちは深刻な薬害を経験してきた。今も、せき止め薬などの乱用抑止は社会課題だ。セルフメディケーションを広げるには、深刻な患者を適切に医師へ紹介することを含め、薬剤師の役割を高める必要がある。

医師の「下請け」から脱しよう

薬学部教育が6年制になって20年になろうとしている。薬効、副作用、相互作用に関する知識が医師よりも広く深いのが薬剤師。処方箋どおりに薬を出す医師の下請けのような仕事は人工知能(AI)が取って代わる日も近い。

東京・台東区の蔵前みどり薬局は、行政指導の例外規定にのっとり処方箋をもたない客にも類似薬を売っている。業界でいう零売(れいばい)薬局だ。ただし売らんかな、ではない。東大付属病院の院内薬剤師の経験者、漢方薬に詳しい薬剤師、病院看護師の経験者らが健康相談や赤ん坊の病気、子育てに関する相談にのる日を定期的に設け、地域住民のセルフメディケーションを手助けしている。

管理薬剤師の坂口真弓氏はプライマリーケアとOTC薬に関する薬学教育の充実を訴える。類似薬を処方箋不要にし、健康保険から外す改革は薬剤師の業務拡大との合わせ技で高い効果を発揮する。血液・尿検査を含む医療行為の一部を薬剤師にみとめ、薬の効き具合を確かめられるようにする。コロナ禍さなか、多くの国がワクチン接種に薬剤師を動員し、実績をあげた事実を思い起こすべきだ。

医療用医薬品と同じ成分をうたうCMが用済みになるのが、本来のすがたであろう。